

第3章 宇部市土地区画整理事業（柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路）に伴う発掘調査

1 調査の経過

宇部市土地区画整理事業に伴い、医学部構内に道路建設が計画されたことを受けて、前章に引き続き宇部市域遺跡発掘調査団を調査主体として、宇部市教育委員会と山口大学埋蔵文化財資料館が合同で発掘調査を行った。現地調査は村田・金子が担当した。

調査区名は前章からの連番とし、今回の調査では前章報告Aトレンチで検出された土器集中部の範囲を確認するために、Aトレンチ北部と重複したFトレンチを設定した。また、医学部敷地西側特殊道路計画に伴い、医学部構内北端の地点にDトレンチ、職員・外来駐車場の西辺にEトレンチを設定した。発掘調査は平成11年3月1日～5月25日に実施した。この間、4月27日に発掘調査の成果について記者発表を行い、5月6日に現地で豆谷和之氏（奈良県田原本町教育委員会・元館員）による調査指導を受けた。調査面積はDトレンチ27.6㎡、Eトレンチ234.9㎡、Fトレンチ118.6㎡（Aトレンチとの重複面積31㎡）、合計381.1㎡である。なお、調査区位置図以外の方位は磁北を示す。

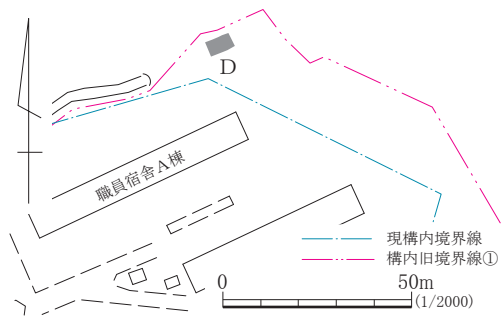


Fig.15 調査区位置図①

2 層序・遺構

(1) Dトレンチ (Fig.17, PL.10)

層序は、第1層：表土・造成土（層厚約66～114cm）、第2層：水田耕土（層厚9～52cm）、第3層：水田床土（灰茶褐色粘質土 層厚19～30cm）、第4～7層（層厚80cm以上）：粘土・砂による堆積層である。他調査区と異なり、水田床土は1層であった。第5層：青灰色粘砂（層厚8～18cm）の検出標高は1.54mで、須恵器壺胴部片 (Fig. 25-

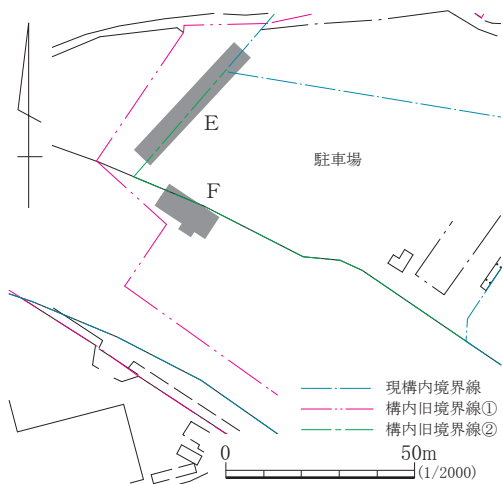


Fig.16 調査区位置図②

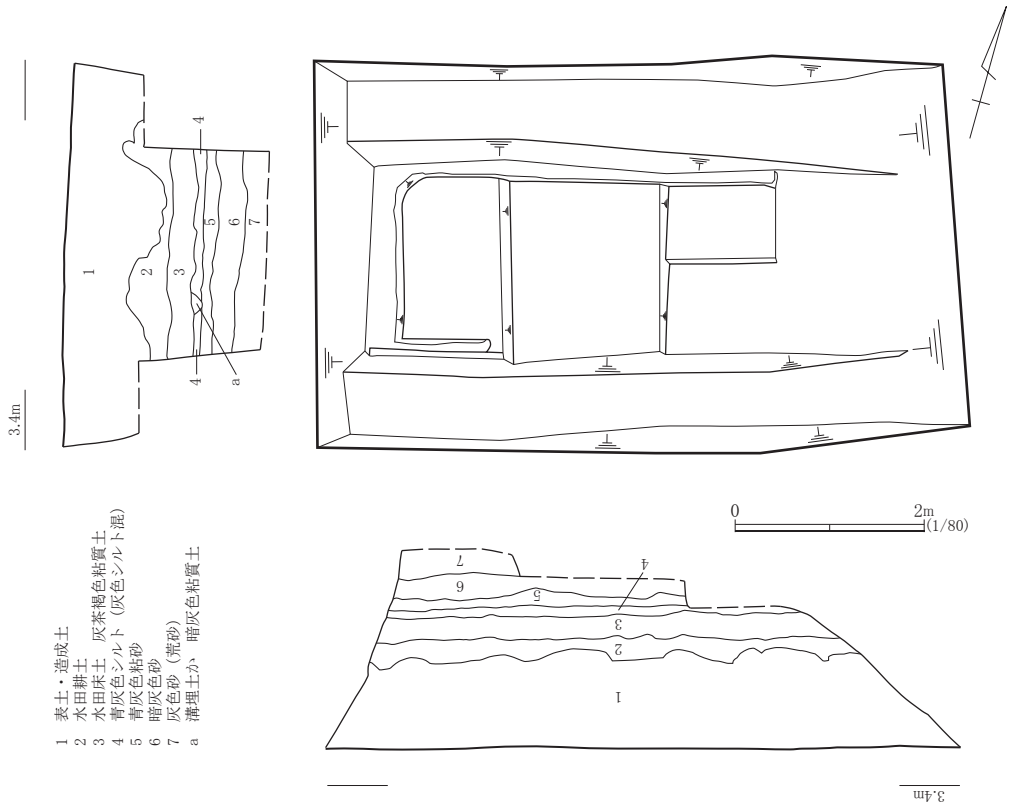


Fig.17 Dトレンチ平面図・断面図

1) が出土した。

遺構は、北西壁で第4層を検出面とする溝とみられる断面を確認したのみである。

(2) Eトレンチ (Fig.18 ~22, PL.11 ~12)

層序は、第1層：表土・造成土（層厚97～114cm）、第2層：水田耕土（層厚5～27cm）、第3層：水田床土Ⅰ（暗茶褐色粘質土 層厚2～8cm）、第4層：水田床土Ⅱ（灰茶褐色土 層厚3～11cm）、第5層（黄茶褐色粘砂 層厚2～4cm 整地土もしくは水田床土か）、第6～8層（層厚64cm以上）：粘土・砂による堆積層である。第5層は原図に記載がないが、堆積状況、土質・色調から水田耕作に伴う整地土もしくは床土と考えられる。第6層（青灰色粘砂 層厚16～28cm）は現地表下約1.3m、標高1.73mで検出し、縄文土器、弥生土器、土師器がややまとまって出土した。これらは小片主体であるが、摩滅が少ないことから調査区北側の丘陵部から流れ込み、比較的短期間で堆積が推測される。調査区北部では、縄文時代後期の鐘崎式土器深鉢1個体分（口径約32%残存）の破片が約100cm四方の範囲からまと

まって出土した(Fig22)。ただし、この深鉢の周辺からは弥生時代終末期から古墳時代前期の土器も出土していることから2次堆積と考えられる。また、第7層：黄灰褐色粘砂（黒褐色粘質土・青灰色粘土混）には部分的に腐植土層が含まれていた。遺構は検出されていない。

(3) Fトレンチ (Fig.23・24, PL.13～15)

前章報告Aトレンチの北部と重複する。層序は、第1層：表土・造成土（層厚100～116cm）、第2層：水田耕土（層厚7～18cm）、第3層：水田床土Ⅰ（暗茶褐色粘質土 層厚2～6cm）、第4層：水田床土Ⅱ（灰茶褐色土 層厚6～12cm）、第5層（黄茶褐色粘砂 層厚2～5cm 整地土もしくは水田床土か）、第6～8層（層厚42cm以上）：粘土・砂による堆積層である。第5層はEトレンチ第5層と同一層と考えられる。原図には記載がないが、Eトレンチと同様の状況から水田耕作に伴う整地土もしくは床土と考えられる。第6層は現地表下約1.3m、標高1.7mで検出した。Eトレンチ第6層と同一層とみられる。

調査区のほぼ全域において、第6層（青灰色粘砂 層厚3～22cm）、第7層（暗灰黄青色粘砂 層厚2～21cm）から土器片が出土した。多くは後者からの出土である。第6層は前章Aトレンチ7層、第7層は第14層に対応する。前章Aトレンチ調査時に、Fトレンチ第6層と第7層は色調の差はほとんどないが、第6層では粘性がやや強く粘土が混入するのに対して、第7層は砂質が強く、やや大きめの粗砂が混入することが確認されており、一連の堆積層と考えられる。第7層は調査区東部の第8層上に

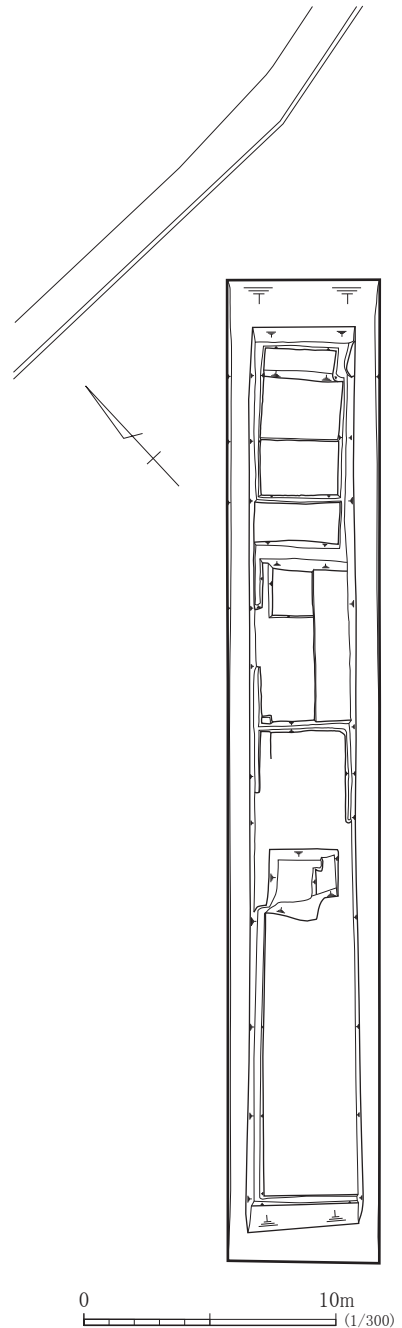


Fig.18 Eトレンチ設定位置図

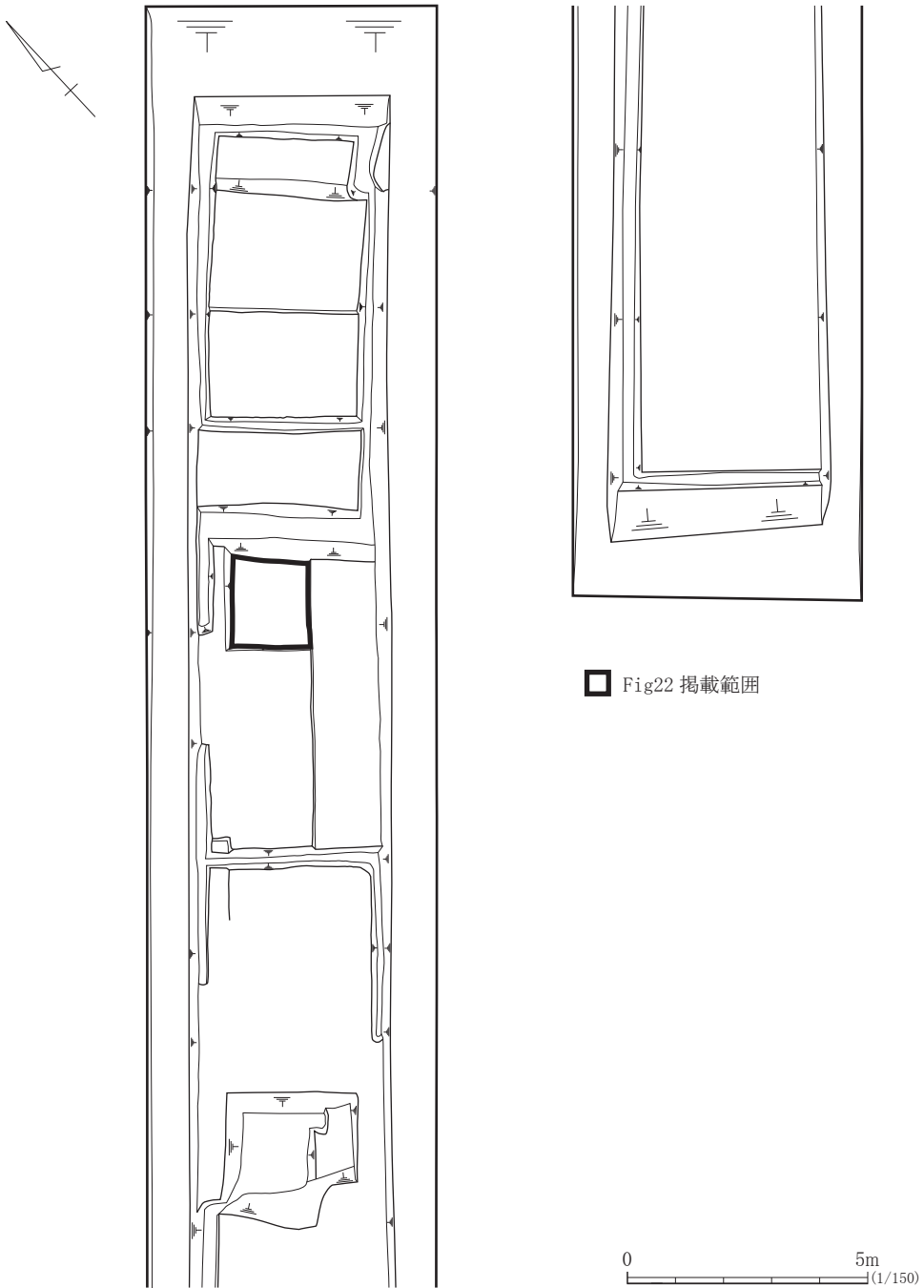


Fig.19 Eトレンチ平面図

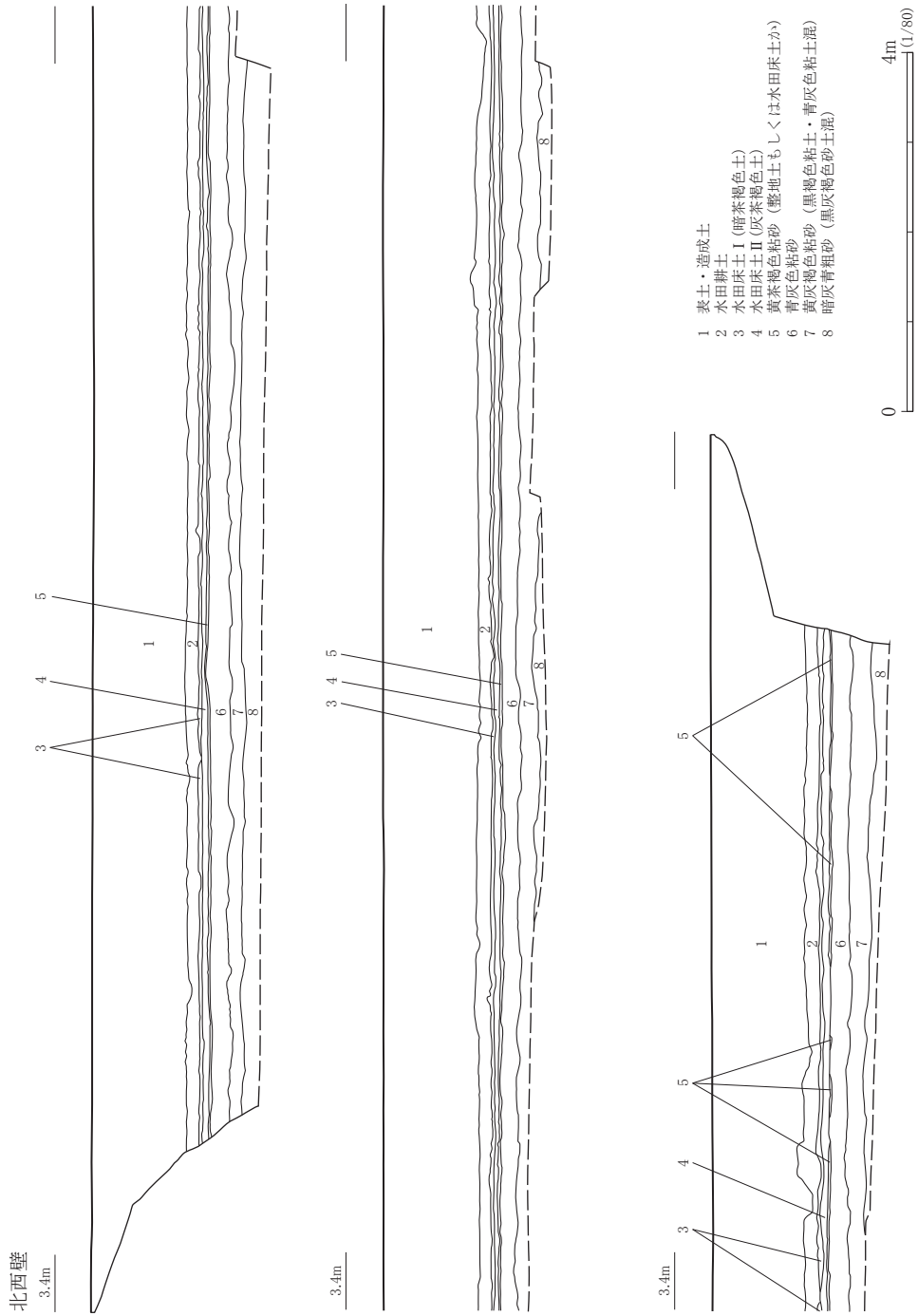


Fig.20 Eトレンチ土層断面図 1

北東壁

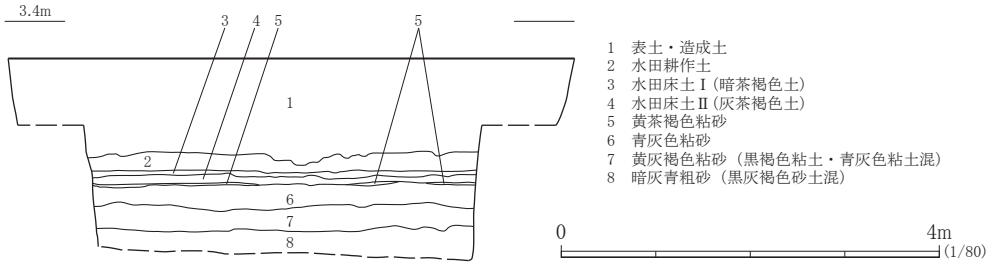


Fig.21 Eトレンチ土層断面図 2

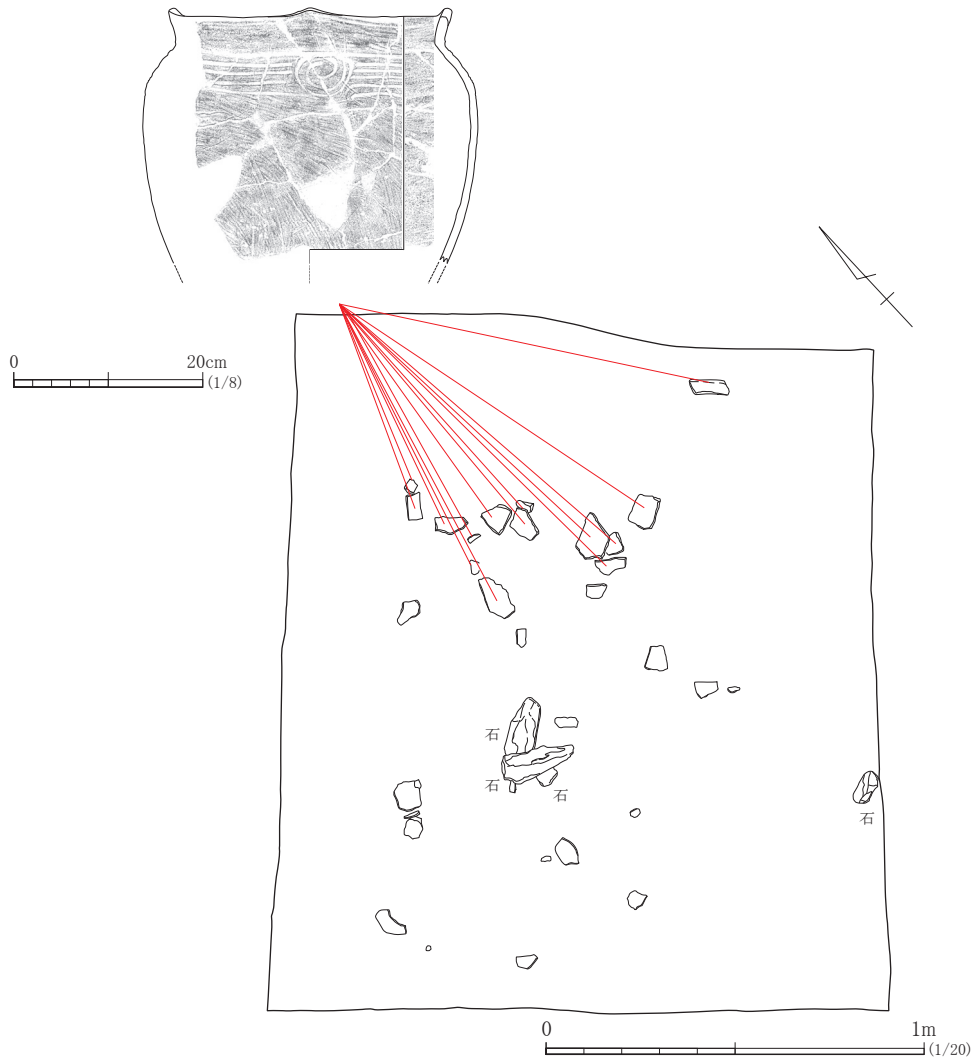


Fig.22 Eトレンチ土器出土状況平面図

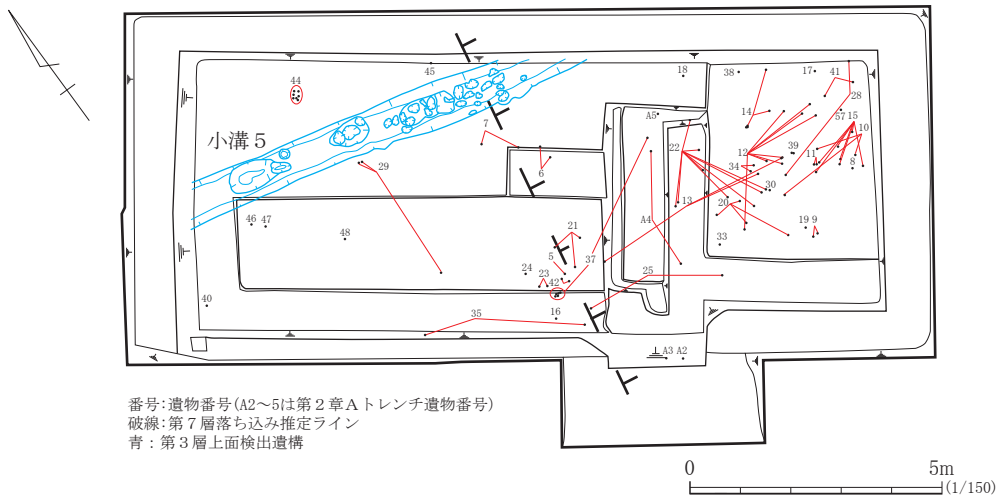


Fig.23 Fトレンチ平面図

西から東へ緩やかに傾斜して堆積している。北東壁では最深部までの距離が約 350 cm で、検出面の標高が 1.57 m、最深部の標高が 1.34 m で標高差は 23 cm である。また、調査区南西壁では検出面の標高が 1.53 m、最深部の標高が 1.3 m で、北東壁とは検出面において 4 cm、底面において 4 cm の標高差がある。以上から第 7 層は北東-南西方向に堆積したと考えられる。土器は調査区東部の第 7 層の落ち込み部分において分布密度がやや高く、相対的に大きい破片が多い傾向が認められた。第 7 層落ち込み推定ラインより西から出土した土器は概ね第 6 層、以東から出土した土器は概ね第 7 層からの出土である。第 6・7 層から出土した土器は弥生時代終末期から古墳時代前期が主体である。特に第 7 層落ち込み部分では若干の縄文土器 (A 2・3) 以外は当該期のものである。一方、第 7 層落ち込み推定ラインより西からは須恵器 (46)、中世の瓦質土器片 (47・48) が少量出土した。摩滅する土器もあるが、全体的には摩滅が少ない傾向が認められることから調査区北側の丘陵部から流れ込んだ 2 次堆積層と考えられる。

遺構は水田耕作に伴うもので、第 3 層上面で溝 1 条を検出した。遺構名は前章からの連番である。

小溝 5 (Fig.23, PL.13)

幅 90 cm、深さ 31 cm、南東-北西方向の溝である。北東壁断面では幅 232 cm で掘り直しが認められる。埋土から、弥生土器もしくは土師器片、中世瓦質土器の足鍋脚部、近世～近代の陶磁器片、剥片、用途不明木製品、用途不明鉄製品、釘が出土した。

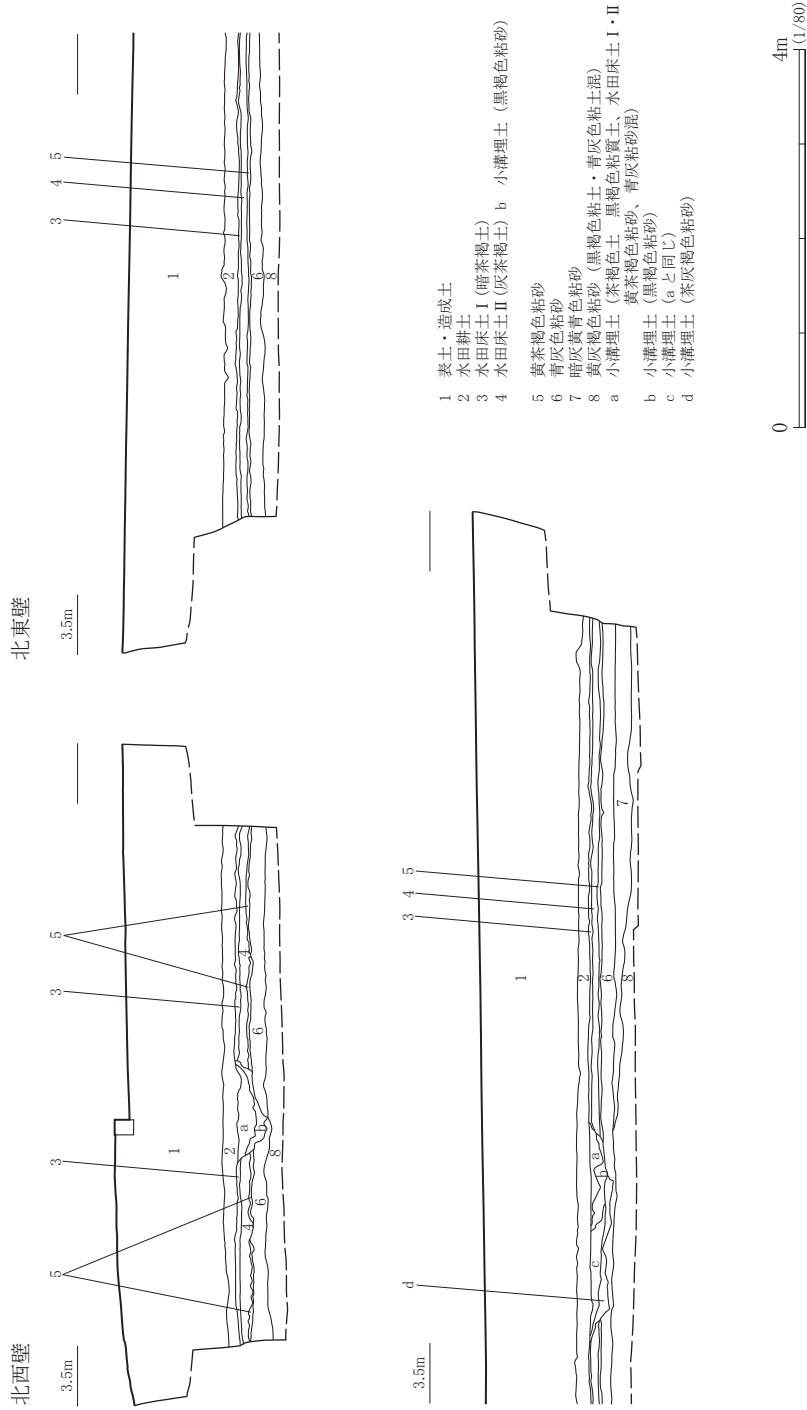


Fig.24 Fトレンチ土層断面図

3 遺物

以下で代表的な遺物を報告するが、水田耕土・床土、遺構から出土した近世以降の遺物については一部にとどめた。また、前章Aトレンチ出土土器のうち、Fトレンチ出土土器と接合する土器も報告する。

(1) 土器

Dトレンチ出土土器 (Fig.25-1, PL.16)

1は第5層(青灰色粘砂)出土の須恵器壺胴部。外面にロクロナデ、内面に回転ヘラケズリを施す。

Eトレンチ出土土器 (Fig.25-2・3, Fig.26-4, PL.16～18)

2～4は第6層(青灰色粘砂)出土。2は縄文時代後期の鐘崎式深鉢。復元口径は30cmで、現状で約32%残存する。口縁部は緩やかな波状口縁で口唇部に沈線を施す。口縁部から胴部上部には文様帯がある。主文様は渦巻文で、渦巻文の左側に5条、右側に6条の沈線を施す。口縁部外面は横方向の二枚貝腹縁による調整後、ヨコナデを施す。同内面は二枚貝腹縁による調整後、ヨコナデ・ヨコミガキを施す。胴部外面は左上がりの二枚貝腹縁による調整であるが、文様帯部分は丁寧にナデ消されている。同内面はやや摩滅するが、横方向の二枚貝腹縁による調整後、ヨコナデ・ヨコミガキを施す。3は縄文土器深鉢底部。底面は接合部で剥離する。外面は摩滅で調整不明。内面はナデ。4と同一個体か。4は縄文時代後～晩期の深鉢底部。外面はタテ・左上がり方向の巻貝による調整、内面は板状工具によるヨコ・左上がりのナデを施す。

Fトレンチ出土土器 (Fig.26-5～Fig.30-53, PL.16・18～20)

4～48は第6層(青灰色粘砂)・7層(暗灰黄青色粘砂)出土土器。厳密な取り上げ層位が不明なため一括したが、前述のように第7層落ち込み部及びその近接部から出土した5～25・28・30・34・37～39・41・42は概ね第7層、それ以外の29・35・40・44～48は第6層からの出土である。

5は縄文時代後期の浅鉢口縁部。内傾して立ち上がる口縁部内外面に1条沈線を施す。

6～43は弥生時代終末期～古墳時代前期の土器。一部を除き厳密な時期区分が困難であるため、観察表では一括して「弥生～土師器」と表記する。当該期の土器は他にも多数出土しているが、大半は壺もしくは甕の胴部片である。比較的接合する破片もあるが、上下・傾き、器形の推定が困難なものは図化していない。

6・7は複合口縁壺口縁部。6は立ち上がり部が接合面で剥離する。外面には刻目が2

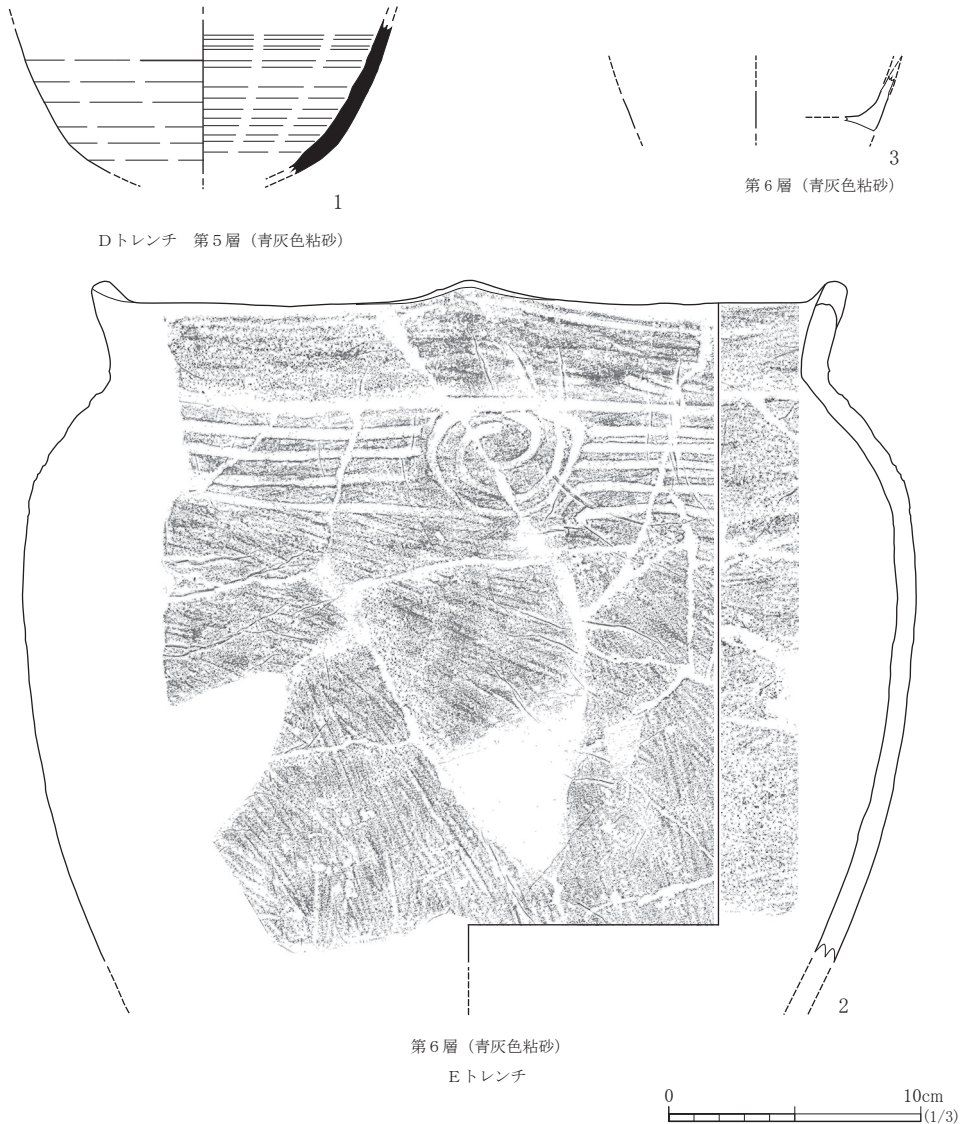


Fig.25 出土遺物実測図①(土器)

箇所残存する。7は口縁部先端をわずかに折り曲げ、口縁部内外面に左上がりのハケを施す。弥生時代終末期か。8・9は短頸壺。いずれも口縁部が短く立ち上がる。9は残存状況が良好で、口縁部外面にタテミガキ・胴部外面にヨコミガキ、口縁部・胴部内面にヨコミガキを施す。10は接合しないが9と同一個体か。11・12は丸底とみられる小型壺の胴部。11の上面は接合面で剥離する。外面は板状工具によるナデ、内面は左上がりのユビナデ。12は外面にヨコハケ、内面にタテハケ後、板状工具によるタテハケを施す。13は複合口

縁壺の胴部。外面に低い断面方形の突帯を貼り付け、板状工具による斜格子状の刻目を施す。外面・内面に左上がりのハケ・タテハケを施す。14は壺の胴部。玉形で上半外面は斜方向のハケ後ナデ、下半外面はタテハケ後ナデ、内面上半は左上がり・ヨコハケ、内面下半は左上がりのハケを施す。15は壺の底部。やや尖り気味の丸底である。弥生時代終末期か。外面は摩滅するが、一部で左上がりのハケが残存する。内面はヨコハケを施す。

16～19は甕の口縁部。16は口縁部がやや長く緩やかに外反する。在来系もしくはV様式系甕であろう。17・18は同一個体か。他にも同一個体とみられる破片がある。外面・内面に左上がりのハケ後にヨコナデを施す。接合関係はないが、20～32の伝統的V様式系甕の口縁部である可能性が高い。19は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口唇部はナデにより凹んでいる。摩滅で調整は不明。布留式系であろう。

20～32は外面にタタキを施す甕の胴部。いずれも伝統的V様式系とみられる。20は長胴で、外面に右上がりのタタキ（1条2.5～3mm 7mm / 2条）後、タテハケ、内面に右上がりのハケを施す。21は球胴で外面に平行・左上がりのタタキ（1条1.5～2mm 3mm / 3条）後、左上がりのハケを施す。内面は左上がりのハケ後にナデを施す。外面全体が被熱しており、外面下半にはススが付着する。22は球胴で、外面は平行タタキ（1条2mm 10mm / 3条）で、下半にはその後ナデを施す。内面はナデを施す。外面全体にススが付着する。23は外面に平行タタキ（1条1.8mm 6.5mm / 3条）後左上がりハケ、内面に左上がりハケを施す。24は外面に平行タタキ（1条1.8mm 8mm / 3条）後左上がりハケ、内面にヨコハケ後ナデを施す。25は外面に平行タタキ（1条1.5mm 10mm / 3条）後左上がりハケ、内面にヨコハケ後ナデを施す。26は外面に平行タタキ（1条1～2mm 10mm / 3条）、内面にナデを施す。27・28は同一個体か。27は外面に平行タタキ（1条2～3.5mm 12～13mm / 3条）、内面に右上がりハケ後、下半にナデを施す。28は外面に平行・右上がりタタキ（1条2～3.5mm 11～13mm / 3条）、内面に右上がりハケ後部分的にナデを施す。29は外面が摩滅している。平行タタキ（1条2mm 9mm / 3条）後タテハケか。内面は右上がりハケを施す。30は外面に平行タタキ（1条2mm 10mm / 3条）、内面にナデを施す。31は外面に平行タタキ（1条2mm 9mm / 3条）、内面にナデを施す。32は外面に平行タタキ（1条2～3mm 11mm / 3条）、内面にナデを施す。33～35は外面にタタキがない甕の口縁部下半～胴部。33は外面に左上がりハケ後、上半にはヨコナデ、内面にヨコハケを施す。34は口縁部外面下半・内面にヨコナデを施す。胴部外面の調整は不明（タテハケか）。胴部内面にはナデを施す。35は口縁部外面下半・内

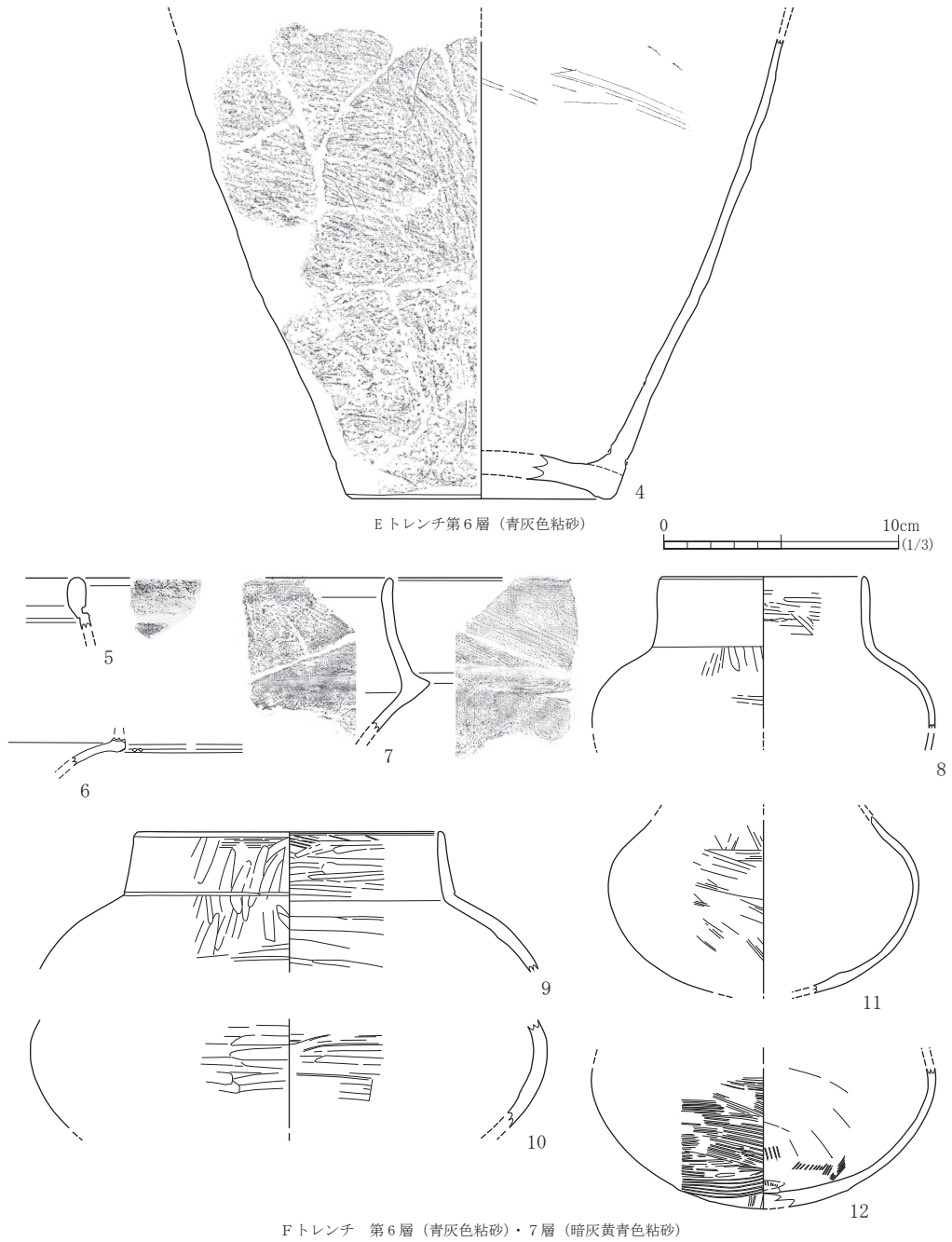
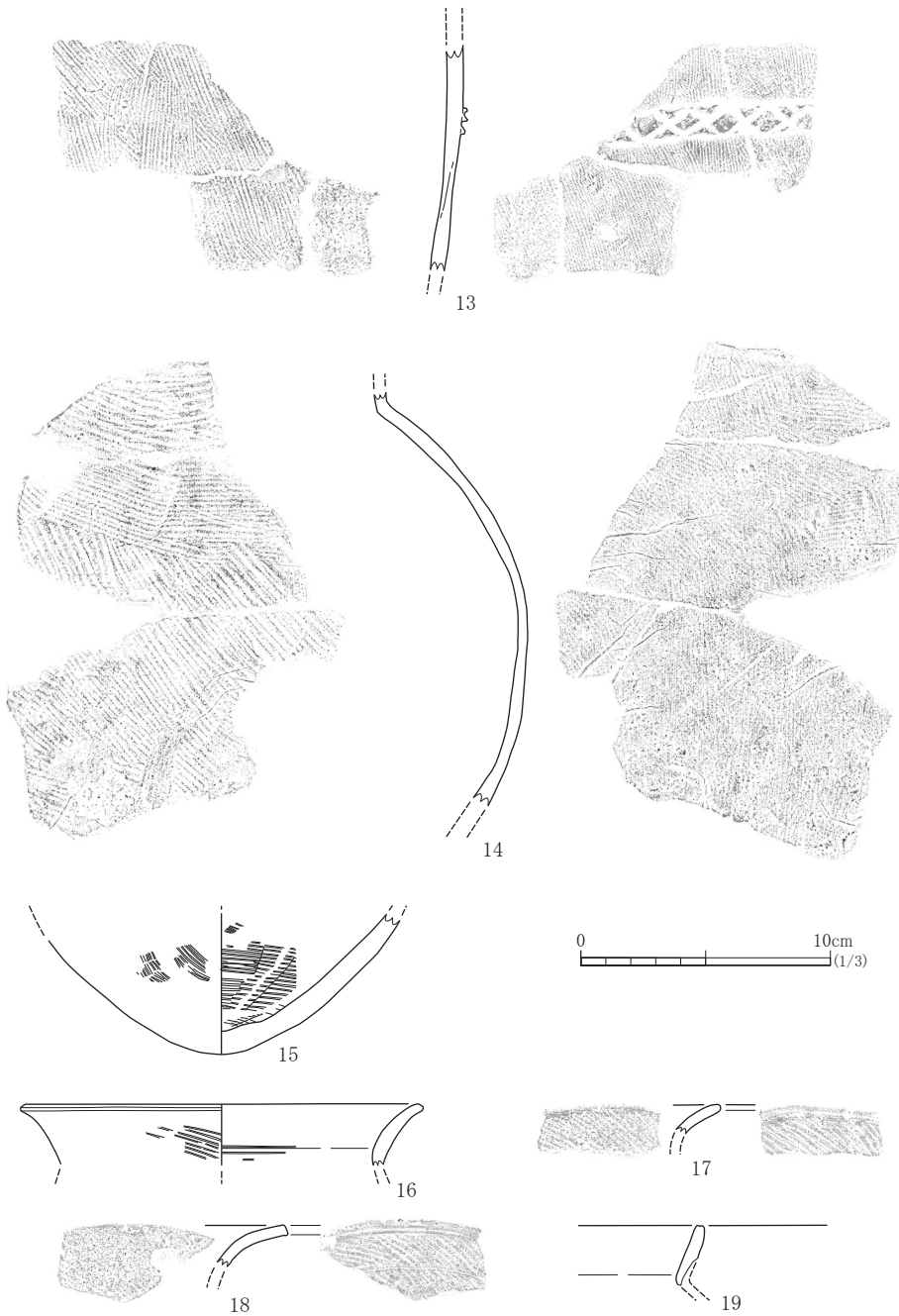


Fig.26 出土遺物実測図②(土器)

遺物



Fトレンチ 第6層 (青灰色粘砂)・7層 (暗灰青色粘砂)

Fig.27 出土遺物実測図③(土器)

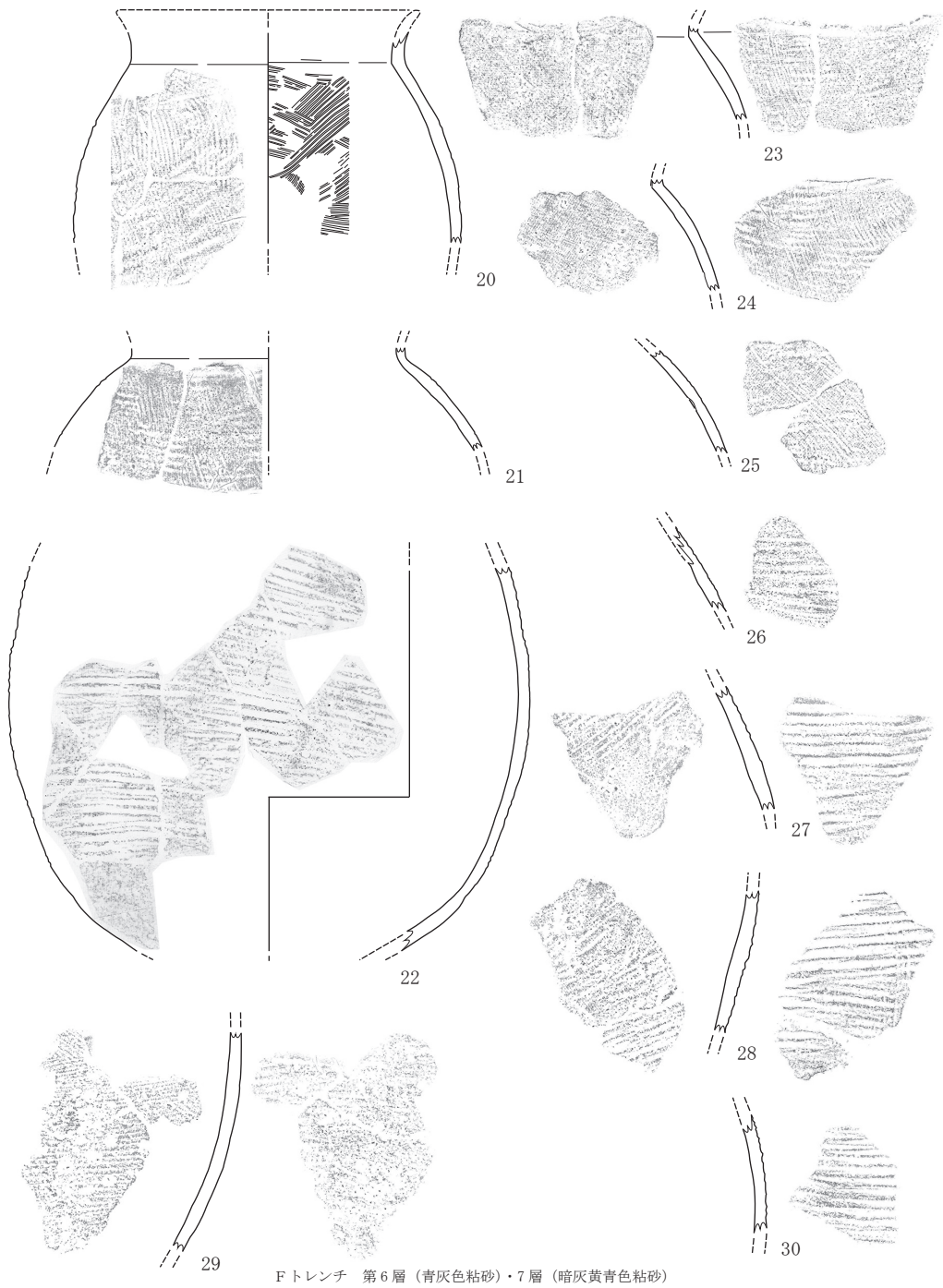


Fig.28 出土遺物実測図④(土器)

面にヨコナデを施す。胴部外面には板状工具によるナデ、胴部内面は左上がりハケ後、ナデを施す。

36・37は甕の底部でいずれもやや尖り気味の丸底である。弥生時代終末期か。外面にナデ、内面にタテハケ後ナデを施す。37の外面は下半に右上がりのタタキ（1条/2mm 9mm/3条）、上半に平行タタキを施す。底面付近は被熱し、上半にはススが付着する。内面下半はヨコハケ後ナデ、上半にはケズリを施す。

38～40は直口口縁の鉢。38は丸底で外面はナデ、口縁部内面にヨコ・斜方向ミガキ、胴部内面に左上がりハケ後、ナデを施す。39は口縁部外面・内面にヨコナデ、胴部外面に左上がりハケ、胴部内面にヨコ・左上がりハケを施す。

41は鉢の胴部。口縁部下半の接合痕が観察できる。やや長い口縁部が想定できることから弥生時代終末期か。摩滅が顕著だが、外面の一部で左上がりのハケが観察できる。内面の調整はナデか。42は壺もしくは鉢の底部。外面にタテミガキを施す。内面は摩滅するが、ケズリ後ナデか。

43～45は高杯。43は坏部。口縁部が長く緩やかに外反する形態から弥生時代終末期に位置づけられる。外面・内面とも左上がりハケ後、ヨコナデを施す。44～45は形態の特徴から古墳時代中期に位置づけられる。同一個体か。44は坏部。上部と下部は接合しないが同一個体として図上復元した。形態にやや歪みがあり、中位で屈曲し口縁部が直線的に外反する。また、先端はヨコナデによってわずかに折り曲げる。摩滅が著しく、外面の調整は不明。内面にはヨコハケ後ナデを施す。45は脚部。裾は屈曲して開く。摩滅が著しく、外面の一部で左上がりのハケが観察できるほか、調整は不明。

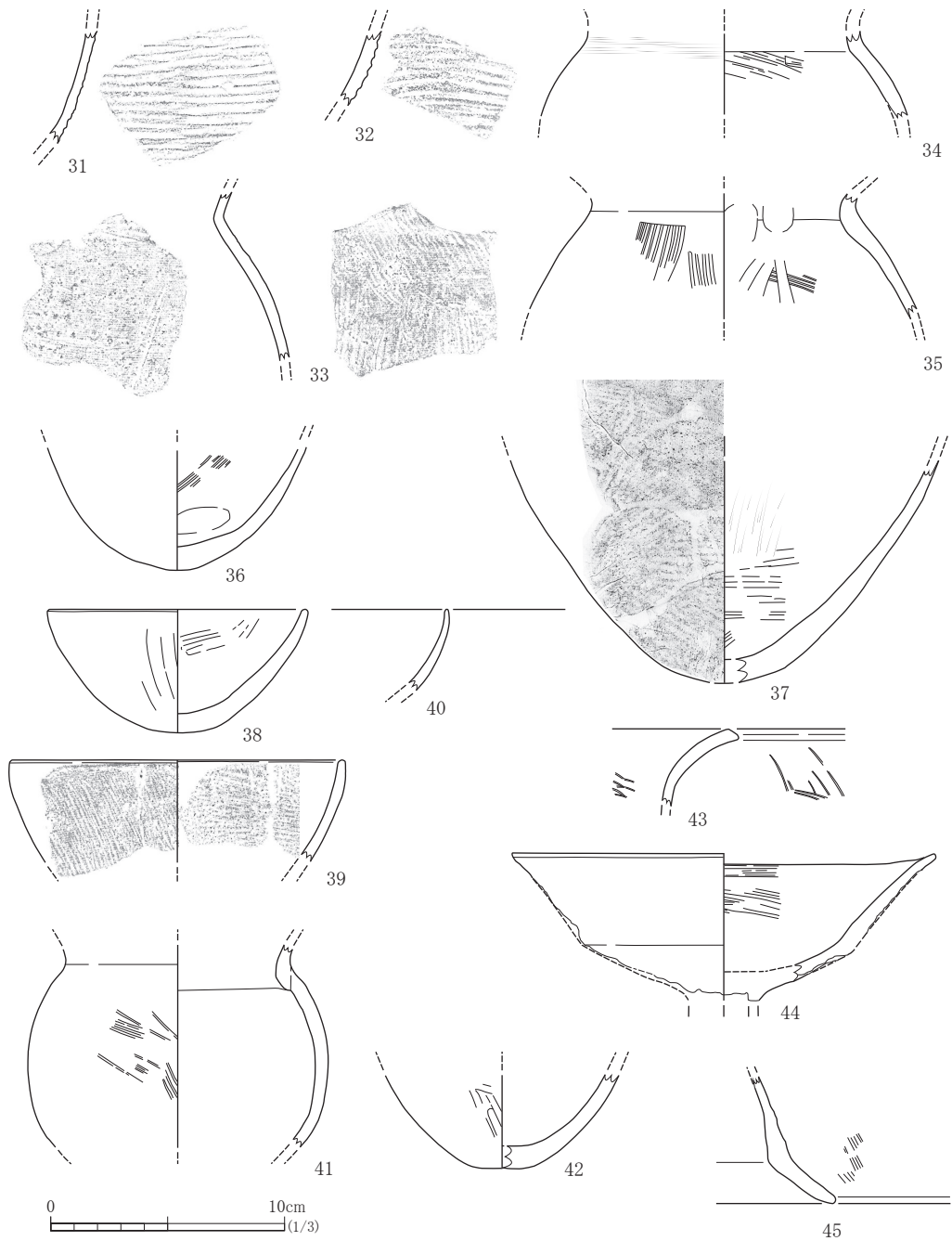
46は須恵器甕胴部。外面に平行タタキ（1条3mm 10.5mm/3条）を施す。内面は輪状のあて具痕がある。

47は瓦質土器足鍋の口縁部。摩滅が著しい。48は中世瓦質土器の茶釜胴部。断面台形の鏝を貼り付ける。外面にはススが付着する。

49は第5層（黄茶褐色粘砂）、50は第3・4層（床土）出土で、いずれも中世瓦質土器の足鍋口縁部。

51・52は小溝5出土。51は中世瓦質土器の足鍋脚部。52は関西系陶器碗（端反碗）の口縁部。外面・内面に灰釉を施釉し、貫入がある。19世紀。

53は第2層（水田耕土）出土の陶器底部。器種は壺や瓶などの可能性がある。底面に白い化粧土を塗り、墨書がある。墨書は上方が欠損しており判然としないが、最下部の字



Fトレンチ 第6層（青灰色粘砂）・7層（暗灰黄青色粘砂）

Fig.29 出土遺物実測図⑤(土器)

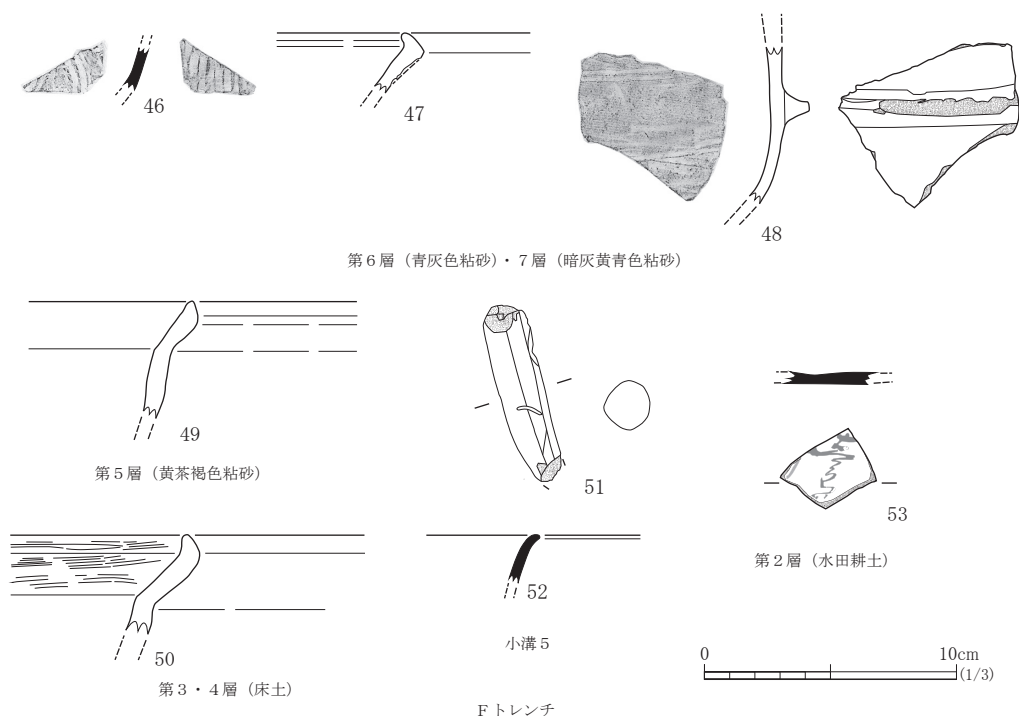


Fig.30 出土遺物実測図⑥(土器)

は「良」で、「■太良(郎)」「■一良(郎)」といった人名である可能性が高い¹⁾。

(2) 石器

Eトレンチ出土石器 (Fig.31-54 ~ 56, PL.21)

54・55は第3・4層(床土)出土。54は楔形石器、55は剥片で石質はいずれもメノウである。56は第6層出土の砥石で、正面・裏面・右側面・左側面を使用している。全体的にやや摩滅する。石質は石英斑岩。

Fトレンチ出土石器 (Fig.31-57, PL.21)

57は第6・7層出土の礎石。扁平な自然石を加工しており、中央部の上下端に溝(抉り)がある。形態は柱状不定形型²⁾に分類される。石質は黒雲母片岩で、最大長35.95cm、最大幅14.0cm、最大厚10.15cm、重量約7200gである。時期は不明。小型船に使用したものであろう。

(3) 銭貨 (Fig.31-58, PL.21)

58はEトレンチ第3・4層(水田床土)出土の寛永通宝で古寛永に相当する。内外面ともやや摩滅する。

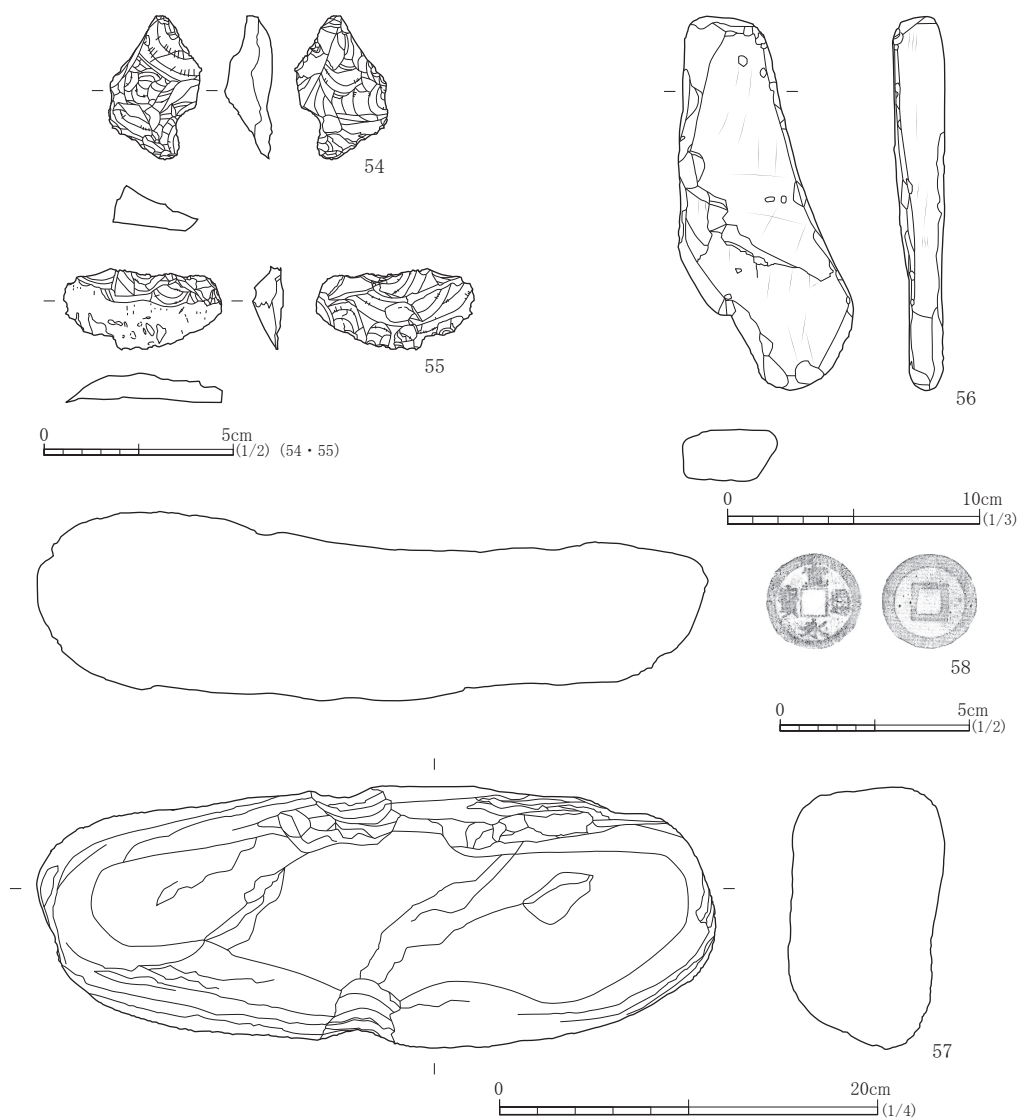


Fig.31 出土遺物実測図⑦(石器・銭貨)

4 小結

医学部構内は宇部市を南北に流れる真締川の右岸に面して位置する。近年の検討³⁾に基づき18世紀末以降の土地利用状況を簡潔にまとめる。近世文書「舟木幸判本控」所収の未ノ二月（寛政11年（1799）2月）の「御届申上候事」の記載から、真締川の河口部は土砂の流出により氾濫原の様相を呈していたが、同9年（1797）冬から同10年（1798）の

真締川河口付け替え工事により土地が安定し、同 11 年（1799）2 月に萩藩へ旧河口の耕地化の願い出があり、同年 4 月に萩藩によりこれが許可された⁴⁾。以後、海生砂層や土砂が堆積した脆弱な砂層の上に床土となる客土を盛ることによって耕地化された。その後、正確な年代は不明だが、A～C・E・F トレンチ周辺は山口県立医科大学学友会館建設以前の昭和 36 年（1961）頃、D トレンチ周辺では宿舍建設以前の昭和 43 年（1968）頃までは水田であったようである。既往の調査では水田床土から旧石器時代から近世に至る複数時期の遺物の出土が報告されている。また、検出される遺構は全て耕地化以降のものである。

次に耕地化以前の状況について述べる。水田床土より下の土層は砂・粘土による脆弱な堆積層である。これらの層では、地域医療教育研修センター敷地⁵⁾で縄文～奈良時代の土器が多数出土した事例があるが、多くの調査地において遺物の出土は散漫である。平成 10 年度調査では、A・F トレンチで少数の縄文土器、須恵器、瓦質土器と多数の弥生時代終末期～古墳時代前期の土器が出土した。その状況から、河川等の流れ込みによる二次堆積と考えられる。真締川関連の堆積作用は複雑であり、今後も古環境の変遷を踏まえた検討が必要である。

次に出土遺物について述べる。平成 10 年度の調査では縄文土器、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器、近世～近代の陶磁器、時期不明の石器類、近世の銭貨、近世～近代の鉄製品等が出土した。このうち、メノウ製の石器については、旧石器時代のものが含まれると報告したが⁶⁾、今回の報告にあたり検討した結果、前章を含めて確実に旧石器時代に属するものは出土していない⁷⁾ので訂正する。E トレンチでは全形がうかがえる鐘崎式土器が 1 個体分出土した。鐘崎式土器は縄文時代後期中葉において東北部九州を中心に分布する土器である。宇部市では月崎遺跡でまとまって出土しており、月崎上層 I に相当する。月崎上層 I は鐘崎式系・瀬戸内系・南九州（綾式）系からなるが、潮見浩氏は後続の月崎上層 II にかけて、九州系土器の影響が著しいと指摘する⁸⁾。また、幸泉水子氏によると医学部構内遺跡が位置する周防灘北岸地域では「鐘崎式系土器の存在は特殊ではなく、むしろ典型的な形のまま様式の一翼を担っていたという基本的な評価は 60 年代から変わっていない⁹⁾」という。今回 E トレンチで出土した土器は縄文時代後期中葉における東北部九州との日常的な交流を裏付ける。

今回最も注目される遺物は弥生時代終末期～古墳時代前期の土器である。これまで宇部市では大須賀遺跡で当該期の石棺、土器棺が検出され¹⁰⁾、土器棺、供献土器として使用された土器が出土している¹¹⁾ほか、まとまった出土事例はなかった。今回の調査で出土した当該

期の土器は二次堆積ではあるが、集落遺跡由来のものとして注目される。伝統的V様式系の甕が多いのも周防地域をはじめ山口県内の他遺跡と共通する。以上から遺跡北方の丘陵上当該期の集落遺跡が存在した可能性が高い。Fトレンチの北方約600mに位置する尾崎古墳¹²⁾（旧称：小串古墳群）では、箱式石棺が4基検出されたとされ、上記の遺跡は関連する集落遺跡であった可能性もある。

以上、平成10年度の調査では、これまでの医学部構内遺跡の評価を大きく変える多大な成果があった。

[注]

- 1) 墨書については山口大学経済学部 木部和昭教授にご教示いただいた。
- 2) 松岡史「碇石の研究」（『松浦党研究』2号、1981年）
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「医学部基幹環境整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査（『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』、2006年）
- 4) 小川国治「近世村落の成立と発展」（『宇部市史』通史編上巻、1992年）
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「医学部地域医療教育研修センター新営工事に伴う予備発掘調査」（『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成22年度－』）
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』、2004年）
- 7) 村田裕一氏のご教示による。
- 8) 潮見浩「宇部の縄文文化－月崎遺跡の縄文式土器について－」（『宇部の遺跡』、1968年）
- 9) 幸泉水子「中国地方における九州鐘崎式系縄文土器」（『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』、2008年）
- 10) 藤田等「宇部の古墳文化」（『宇部の遺跡』、1968年）
- 11) 中野一人「本州西端地域の古式土師器資料（第一報）」（『山口県立山口博物館研究報告』第2号、1972年）
- 12) 山口県教育委員会『山口県文化財地図情報システム』、2008年
- 13) 注10)と同じ

出土遺物観察表

Tab.4 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	備考
								①外面	②内面		
1	Dトレンチ	第5層	須恵器 壺	胴部				①②灰色		0.5~2mmの砂粒を少量含む	
2	Eトレンチ	第6層	縄文土器 深鉢	口縁~胴部	(30.0)			①② 灰オリーブ色		0.5~3.5mmの砂粒を多く含む	
3	Eトレンチ	第6層	縄文土器 深鉢	底部				①にぶい黄色 ②オリーブ黄色		0.5~3.5mmの砂粒を多く含む	4と同一か
4	Eトレンチ	第7層	縄文土器 深鉢	底部	(11.5)			①明赤褐色 ②にぶい黄褐色		0.5~6mmの砂粒を多く含む	3と同一か
5	Fトレンチ	第6・7層	縄文土器 浅鉢	口縁部				①にぶい黄褐色 ②浅黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
6	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 複合口縁壺	口縁部				①浅黄色 ②灰灰色		0.5~4mmの砂粒を多く含む	
7	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 複合口縁壺	口縁部				①暗灰色 ②灰白色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
8	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	口縁~胴部	(8.6)			①② 灰オリーブ色		0.5~5.5mmの砂粒を多く含む	
9	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	口縁~胴部	(13.2)			①にぶい黄褐色 ②浅黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	10と同一か
10	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴部				①にぶい黄色 ②浅黄色		0.5~2mmの砂粒を多く含む	9と同一か
11	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴部				①灰色 ②灰色・黒色		0.5~5mmの砂粒を多く含む	
12	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴部				①浅黄色 ②灰黄色		0.5~4mmの砂粒を多く含む	
13	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴部				①灰黄色 ②灰黄色		0.5~2mmの砂粒を多く含む	
14	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴部				①浅黄色 ②灰白色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
15	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 壺	胴~底部				①オリーブ黄色 ②灰白色		0.5~5mmの砂粒を多く含む	
16	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	口縁部	(15.8)			①②灰黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
17	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	口縁部				①灰黄色 ②灰白色		0.5~2.5mmの砂粒を多く含む	18と同一か
18	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	口縁部				①②にぶい黄褐色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	17と同一か
19	Fトレンチ	第6・7層	土師器 甕	口縁部				①灰黄色 ②にぶい黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
20	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①灰黄色 ②にぶい黄褐色		0.5~6mmの砂粒を多く含む	
21	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①浅黄色 ②褐灰色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
22	Aトレンチ Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①にぶい黄色 ②灰黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
23	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①②灰黄色		0.5~2mmの砂粒を多く含む	
24	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①灰黄色 ②灰白色		0.5~4mmの砂粒を多く含む	
25	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①暗灰黄色 ②灰黄色		0.5~5mmの砂粒を多く含む	
26	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①灰オリーブ色 ②オリーブ黄色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	
27	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①浅黄色 ②浅黄褐色		0.5~4mmの砂粒を多く含む	28と同一か
28	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①②にぶい黄褐色		0.5~4mmの砂粒を多く含む	27と同一か
29	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①赤褐色 ②にぶい黄色		0.5~8mmの砂粒を多く含む	
30	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①②灰黄色		0.5~2mmの砂粒を多く含む	
31	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①褐色 ②にぶい黄褐色		0.5~5mmの砂粒を多く含む	
32	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	胴部				①にぶい黄色 ②灰黄色		0.5~2mmの砂粒を多く含む	
33	Fトレンチ	第6・7層	弥生~土師器 甕	口縁部下半~胴部				①灰黄色 ②灰白色		0.5~3mmの砂粒を多く含む	

宇部市土地区画整理事業（柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路）に伴う発掘調査

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土	備考
								①外面	②内面		
34	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 甕	口縁部下半～胴部				①黄灰色 ②灰黄色	0.5～4mmの砂粒を多く含む		
35	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 甕か	口縁部下半～胴部				①②灰黄色	0.5～3mmの砂粒を多く含む		
36	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 甕	底部				①浅黄色 ②淡黄色	0.5～3mmの砂粒を多く含む		
37	Aトレンチ Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 甕	胴～底部				①灰オリーブ色 ②暗灰黄色	0.5～5mmの砂粒を多く含む		
38	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 鉢	口縁～底部	(11.2)	3.1	5.3	①灰黄色 ②灰白色	0.5～5mmの砂粒を多く含む		
39	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 鉢	口縁部	(14.4)			①褐灰色 ②灰黄色	0.5～2mmの砂粒を多く含む		
40	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 鉢	口縁部				①にぶい橙色 ②灰褐色	0.5～4mmの砂粒を多く含む		
41	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 鉢	胴～底部				①淡黄色 ②灰色	0.5～4mmの砂粒を多く含む		
42	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 壺もしくは鉢	底部		2.8		①②灰黄色・黒色	0.5～6mmの砂粒を多く含む		
43	Fトレンチ	第6・7層	弥生土器 高杯	杯部				①にぶい黄褐色 ②浅黄褐色	0.5～3mmの砂粒を多く含む		
44	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 高杯	杯部	18.1			①淡黄色 ②灰オリーブ色	0.5～5mmの砂粒を多く含む	45と同一か	
45	Fトレンチ	第6・7層	弥生～土師器 高杯	脚部				①橙色 ②灰黄色	0.5～4mmの砂粒を多く含む	44と同一か	
46	Fトレンチ	第6・7層	須恵器 甕	胴部				①②灰色	0.5～5mmの砂粒を少量含む		
47	Fトレンチ	第6・7層	瓦質土器 足鍋	口縁部				①橙色 ②灰オリーブ色	0.5～2mmの砂粒を多く含む		
48	Fトレンチ	第6・7層	瓦質土器 茶釜	胴部				①灰黄色 ②灰色	0.5～7mmの砂粒を多く含む		
49	Fトレンチ	第5層	瓦質土器 足鍋	口縁部				①灰黄色 ②灰白色	0.5～3mmの砂粒を多く含む		
50	Fトレンチ	床土	瓦質土器 足鍋	口縁部				①灰白色 ②浅黄色	0.5～2mmの砂粒を多く含む		
51	Fトレンチ	小溝5	瓦質土器 足鍋	脚部				①②灰白色	0.5～2mmの砂粒を多く含む		
52	Fトレンチ	小溝5	陶器 碗	口縁部				素地：淡黄色 釉：灰色・透明	精良	関西系	
53	Fトレンチ	水田耕土	陶器 不明	底部				素地：にぶい橙色 釉：灰白色	精良	墨書あり	

Tab.5 出土遺物観察表(石器・銭貨)

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
54	Eトレンチ	第3・4層 (水田床土)	楔形石器	3.82	2.49	1.29	7.45	メノウ (玉髓)	
55	Eトレンチ	第3・4層 (水田床土)	剥片	2.2	4.2	0.82	6.8	メノウ (玉髓)	
56	Eトレンチ	第6層	砥石	14.9	7.0	2.1	236.52	石英斑岩	
57	Fトレンチ	第6・7層	砥石	35.95	14.0	10.15	約7200	黒雲母片岩	
58	Eトレンチ	第3・4層 (水田床土)	銅銭 「寛永通宝」	直径2.53 孔辺0.6			2.4	青銅	